

事項	土壌グループ別の「つがるロマン」玄米タンパク質含有率の主な低減技術																							
ねらい	<p>水稻品種「つがるロマン」の食味向上のためには、これまで以上に玄米タンパク質含有率の低減を図る必要がある。今回、「つがるロマン」栽培農家に対し行ったアンケート調査の結果を解析し、土壌グループ別に玄米タンパク質含有率の主な低減技術を明らかにしたので、指導上の参考に供する。</p>																							
指導	<p>1 「つがるロマン」の栽培に当たっては、「つがるロマン栽培マニュアル」(平成9年)に基づいた栽培管理を行い、地域別生育指標、土壌別施肥基準、栄養診断基準等を守ることが基本であるが、以下に留意することにより玄米タンパク質含有率の一層の低減が可能になる。</p> <p>2 各土壌グループの玄米タンパク質含有率の主な低減技術 この表は、土壌グループ別の玄米タンパク質含有率を低減させるための主要技術とその内容を示したものである。</p>																							
参考	<table border="1"> <thead> <tr> <th>土壌グループ</th> <th>主要技術</th> <th>技術の内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>泥炭・黒泥</td> <td>①落水時期 ②わら処理 ③中干し ④暗きよ ⑤耕起深 ⑥基肥窒素量</td> <td>適期落水(出穂後20~25日)を行う 生わらは投入せず、堆肥として投入する 強い中干しは行わない 暗きよを行う 暗きよにより乾田化が進んだほ場では深耕も有効である 基肥窒素量は適量を施用する</td> </tr> <tr> <td>強グライ</td> <td>①わら処理 ②追肥時期 ③収穫時期 ④土壌改良資材</td> <td>堆肥を投入し、生わらを投入できる地帯では秋鋤込みとする 幼穂形成期頃までに追肥は終了する 刈遅れとならないようにする ようりんの施用が望ましい</td> </tr> <tr> <td>グライ</td> <td>①追肥窒素量 ②耕起深 ③登熟期水管理 ④暗きよ</td> <td>追肥窒素量は2kg/10aまでとする 12cm前後とし深耕は行わない 間断かんがい、掛け流しが有効である 暗きよを行う</td> </tr> <tr> <td>灰褐色</td> <td>①登熟期水管理 ②追肥時期 ③収穫時期 ④中干し</td> <td>間断かんがい、掛け流しを行う 減数分裂期以降の追肥は行わない 刈遅れとならないようにする 田面に軽く亀裂が入る程度が望ましい</td> </tr> <tr> <td>黒色・黄褐色</td> <td>①追肥時期 ②わら処理* ③中干し ④土壌改良資材</td> <td>幼穂形成期までに追肥は終了する 安定生産のためには堆肥及び秋わら鋤込みは必要である 中干しは田面に亀裂が入るまで行う ようりんの施用が望ましい</td> </tr> <tr> <td>礫層・礫質</td> <td>①耕起深 ②落水時期* ③わら処理 ④登熟期水管理*</td> <td>16cm以上の深耕を行う 安定生産のために適期の落水を行う 堆肥の効果が高い 安定生産のためにはたん水や掛け流しが望ましい</td> </tr> </tbody> </table>			土壌グループ	主要技術	技術の内容	泥炭・黒泥	①落水時期 ②わら処理 ③中干し ④暗きよ ⑤耕起深 ⑥基肥窒素量	適期落水(出穂後20~25日)を行う 生わらは投入せず、堆肥として投入する 強い中干しは行わない 暗きよを行う 暗きよにより乾田化が進んだほ場では深耕も有効である 基肥窒素量は適量を施用する	強グライ	①わら処理 ②追肥時期 ③収穫時期 ④土壌改良資材	堆肥を投入し、生わらを投入できる地帯では秋鋤込みとする 幼穂形成期頃までに追肥は終了する 刈遅れとならないようにする ようりんの施用が望ましい	グライ	①追肥窒素量 ②耕起深 ③登熟期水管理 ④暗きよ	追肥窒素量は2kg/10aまでとする 12cm前後とし深耕は行わない 間断かんがい、掛け流しが有効である 暗きよを行う	灰褐色	①登熟期水管理 ②追肥時期 ③収穫時期 ④中干し	間断かんがい、掛け流しを行う 減数分裂期以降の追肥は行わない 刈遅れとならないようにする 田面に軽く亀裂が入る程度が望ましい	黒色・黄褐色	①追肥時期 ②わら処理* ③中干し ④土壌改良資材	幼穂形成期までに追肥は終了する 安定生産のためには堆肥及び秋わら鋤込みは必要である 中干しは田面に亀裂が入るまで行う ようりんの施用が望ましい	礫層・礫質	①耕起深 ②落水時期* ③わら処理 ④登熟期水管理*	16cm以上の深耕を行う 安定生産のために適期の落水を行う 堆肥の効果が高い 安定生産のためにはたん水や掛け流しが望ましい
土壌グループ	主要技術	技術の内容																						
泥炭・黒泥	①落水時期 ②わら処理 ③中干し ④暗きよ ⑤耕起深 ⑥基肥窒素量	適期落水(出穂後20~25日)を行う 生わらは投入せず、堆肥として投入する 強い中干しは行わない 暗きよを行う 暗きよにより乾田化が進んだほ場では深耕も有効である 基肥窒素量は適量を施用する																						
強グライ	①わら処理 ②追肥時期 ③収穫時期 ④土壌改良資材	堆肥を投入し、生わらを投入できる地帯では秋鋤込みとする 幼穂形成期頃までに追肥は終了する 刈遅れとならないようにする ようりんの施用が望ましい																						
グライ	①追肥窒素量 ②耕起深 ③登熟期水管理 ④暗きよ	追肥窒素量は2kg/10aまでとする 12cm前後とし深耕は行わない 間断かんがい、掛け流しが有効である 暗きよを行う																						
灰褐色	①登熟期水管理 ②追肥時期 ③収穫時期 ④中干し	間断かんがい、掛け流しを行う 減数分裂期以降の追肥は行わない 刈遅れとならないようにする 田面に軽く亀裂が入る程度が望ましい																						
黒色・黄褐色	①追肥時期 ②わら処理* ③中干し ④土壌改良資材	幼穂形成期までに追肥は終了する 安定生産のためには堆肥及び秋わら鋤込みは必要である 中干しは田面に亀裂が入るまで行う ようりんの施用が望ましい																						
礫層・礫質	①耕起深 ②落水時期* ③わら処理 ④登熟期水管理*	16cm以上の深耕を行う 安定生産のために適期の落水を行う 堆肥の効果が高い 安定生産のためにはたん水や掛け流しが望ましい																						
内容	<p>(注) 1 上位の要因ほど効果が高い 2 * を付した要因は、玄米タンパク質含有率の低減効果は小さいが、生育及び収量の安定化のためには必要な技術である</p>																							
期待される効果	<p>「つがるロマン」の土壌グループ間の玄米タンパク質含有率の変動が小さくなり、食味の向上が図られる。</p>																							
利用上の注意事項	<p>1 基肥全層施肥穂肥体系での結果である。 2 各要因の技術の実施の際は、稲作の基本的注意事項を守り、その年の気象条件、「つがるロマン」の生育状況を十分に考慮して行う。</p>																							
担当	青森県農業試験場 環境部	対象地域	「つがるロマン」作付け地域																					
発表文献等	平成11~13年度 青森県農業試験場成績概要集																							

【根拠となった主要な試験結果】

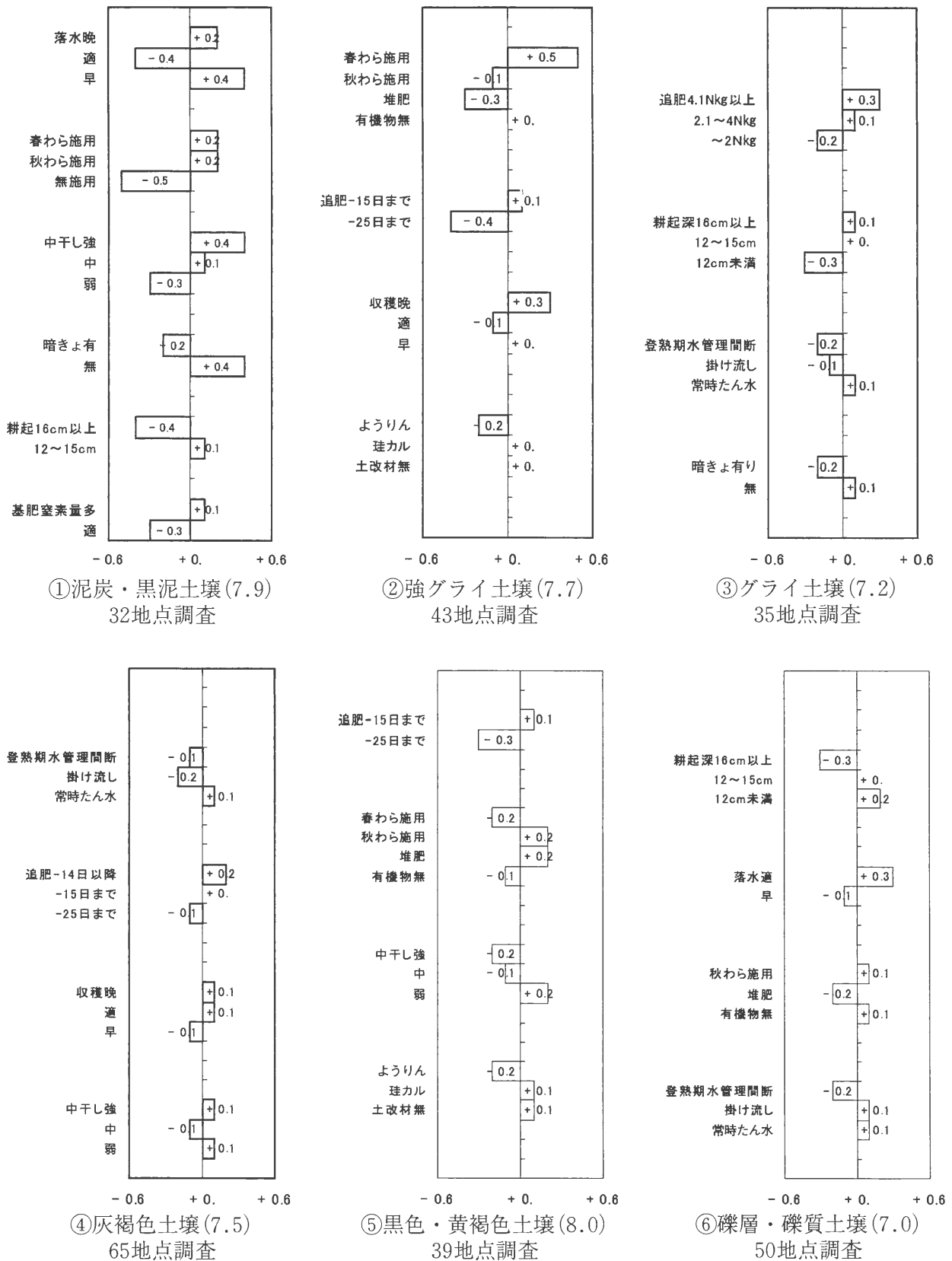


図1 数量化Ⅰ類による要因の土壌グループの平均玄米タンパク質含有率に対する増減効果 (平成11~13年 青森農試)

(注) 1 全層基肥穂肥体系
2 ()内の数字は調査した玄米タンパク質含有率(%)を示す